高等教育におけるグローバル人材の育成という課題と明治期高等教育における英語教育
―明治期欧化下政策におけるラフカディオ・ハーンによる英語教授法を中心に―

中尾瑞樹（関西大学教育開発支援センター）

要旨

文科省中教審答申において、近年課題化されている高等教育におけるグローバル人材の育成という課題に関して、本稿では、大きく 2 つの観点から論じた。1 点目は、現代の特にアメリカの高等教育機関や研究機関において開発されてきている英語教授法の特性を、その現実的な効果と問題や課題のそれぞれの観点から分析し、現在の教育現場においても使用されている比較的古い教授法であるオーディオ・リンガル法との比較を通して、その共通性、それぞれの有効性、現状での課題等の諸観点から各教授法のフレームワークの問題性を論じたものである。特に近年の英語教授法としてコミュニカティブ・アプローチについては詳細に分析した。2 点目は、謂わば「温故知新」的な観点から、明治期欧化政策のもとで東京帝国大学を筆頭に英語教育が求められる中、ラフカディオ・ハーンが、日本で 2 番目の英語ネイティブの東京帝大の英語英文学講師として就任し、その時の英語講義の講義録が当時の学生の手によって残されており、当該講義録からハーンの英語教授法を析出し、その結果、現代のグローバル人材育成論の中での英語教授法においても応用的に有用であると考えられる、緻密に計算されたと思しきハーン独自の教授法が浮かび上がってきた。

本稿ではそのポイントとして大きく 2 点を指摘した。1 点目は、現代の英語教育の現場においても必ず問題となる英米と日本との間のカルチャーギャップを逆手にとって、逆にこのカルチャーギャップを利用するような形で、その対象となる“woman”という概念を、様々な用例や角度から具体的なイメージを多用して説明することで、段階的に学生の理解を深めていくという教授法である。2 点目は当時の英米の小説や詩の最重要テーマとなっていた“love”という概念について、あらゆる辞書的定義や表層的な用法、意味論を超えて、“love”という一語が孕む「語彙の深層性」にまで掘り下げて、踏み込んだ説明に到達し、一つの英単語において、驚くほど深い奥行きの存在することを学生に明示し、英語の「深淵」ともいうべき世界を学生に悟らしめようとする意図を持った教授法であり、これらハーンにおける 2 点の教授法はいずれも現代の高等教育現場における英語教授法の再構築を促すような内容であった。

キーワード　グローバル人材の育成、英語教授法、コミュニカティブ・アプローチ、ラフカディオ・ハーン、カルチャーギャップ／the rearing of global human resources, English teaching methods, Communicative Approach, Lafcadio Hearn, culture gap

１．高等教育におけるグローバル人材の育成という課題と英語教授法

高等教育の現場において、グローバル人材の育成ということが課題とされて久しい。

1 子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について

> 我が国においては、高齢者人口が増大する一方で生産年齢人口は減少し続けるなど、主要先進国でもまれに見る速さで少子高齢化が進んでいます。また、グローバル化の進展に伴う国際競争の激化が進んでおり、こうした中で、日本が将来にわたり成　長・発展し、一人一人の豊かな人生を実現するためには、少子化を克服するとともに、新たな社会的価値・経済的価値を生むイノベーションを創出し、国際的な労働市場で活躍できる人材の育成や多様な価値観を受容し、共生していくことができる人材の育成が求められています。[1]

2014 年度段階中教審答申でも、少子高齢化による生産年齢人口の減少に相まって、グローバル化による国際競争の激化を乗り越え、「新たな社会的価値・経済的価値を生むイノベーションを創出し、国際的な労働市場で活躍できる人材の育成」すなわち「グローバル人材」の育成が喫緊の課題として取り上げられている。この課題は克服されつつあるのか。

現在、多くの高等教育機関で、取り組みとしては進められつつある。ネイティブ講師による、英語、英会話授業の導入。TOEFL や IELTS など、民間の 4 技能試験による入試や卒業認定、全授業の英語化、交換留学制度のデュアルディグリー制などを利用したプロモーティング、などなど。

一方で古色蒼然とした、日本人英語講師による文法訳読法による授業や、ネイティブ、ノンネイティブを問わず、昔ながらの教授法であるオーディオ・リンガル法が依然として使用されている授業ケースも多く存在するだろう。

オーディオ・リンガル法は、米ミシガン大学のフリーズのチームによって戦後開発された教授法で、文字通り学習者にオーディオテープを聞かせ、その発音、発話をミミクリー・メモライズ、すなわち聴覚からの音声をミミクリー（模倣）し、メモライズ（暗記）させる 50 年代から 60 年代のアメリカにおいては、非常に一般的となった教授法である[2]。

その後、GDM 法[3]や TPR 法[4]、VT 法[5]など様々な教授理論が発案されたが、これらは、オーディオ・リンガル法における聴覚の優先に加えて、その記憶に際して、身体運動を利用するという点で共通し、オーディオ・リンガル法の改良版と言ってよい。

ところが、最新の神経科学や発達心理学では、言語習得における「視覚」の優位性を明らかにしつつある。インディアナ大学のデール・センゲロブやカリフォルニア大学ロサンゼルス校のスコット・ジョンソンが、その代表例だが、彼らによれば、乳幼児は視覚によって大人の口や舌の動きを観察し、大人の意図する物事の単語やその正確な発音をマスターするのだという[6]。そうであれば、我々は高等教育における英語教授法において、まず視覚にフォーカスした新たな教授法を開発する必要があるだろう。

現時点で、ネイティブ講師の口の動きを観察するという方法もないことはないが、例えば、L の発音において、舌先を上顎のどのポイントにどの程度の強度と感覚でつけるのかということや、N の発音において、舌をどの範囲で上顎につけ、咽頭をどのように具体的に使うのかといった、外部から隠れる部分の観察は原理的に困難である。ところが乳幼児は、母体から極めて近い位置にポジショニング可能で、口腔の奥まで観察出来る。我々は、現時点で、このような乳幼児の言語習得過程を応用した英語教授法を持たないが、近い将来には、如上の原理を応用した教授法が開発されるべきであろう。

２．アメリカにおけるコミュニカティブ・アプローチの開発とその有効性と課題

さて、アメリカにおいては、様々な英語教授法が、現在までに開発されてきている。最も、最新で、現実的かつ実際的、実用的な手法と言えるのが、コミュニカティブ・アプローチと呼ばれるもので、ロールプレイやシミュレーションを多用し、

ナチュラルな臨機応変の「言語運用」に力点を置いたものである[7]。

現在、コミュニカティブ・アプローチを導入している高等教育機関は管見の範囲ではない。

リアル･イングリッシュなどと呼ばれる実用性、実際性の英語運用能力向上に優れた英語教授法であると言えるが、一連のロールプレイのナチュラルな流れを重視するため、細部のグラマーミスやミススペル、ストラクチャーの間違いや語彙の誤りなど、その都度その都度のミステイクが充分に指摘されず、誤用が定着してしまうスキームに難点がある。そのため、英語運用能力や４技能試験の点数が相対的に低い学習者には、ハードルが高い側面があり、学習者の萎縮を発生させてしまう危険性もある。また担当する教員によっては、発音やアクセントの厳密性をスルーしてしまう可能性もあり、ネイティブに対する通用性のないジャパニーズ・イングリッシュを定着させてしまう危険性もある。

如上の問題点を考慮すると、コミュニカティブ・アプローチは、リアルなイングリッシュ・コミュニケーションの運用能力修得に関して優れた側面もあるものの、現時点での一律な高等教育英語への導入は時期早尚であるかもしれない。

とは言え、現在、実際上の様々なケースにおいて、臨機応変にリアルな英語を運用出来る能力を育成するのに、最も適した方法がコミュニカティブ・アプローチ以外に見当たらないという点は、この教授法の最も魅力的な側面であることは否定出来ない。

例えば、現在、アメリカ言語学研究所などが、所謂、映画やドラマなどのアクターズ・イングリッシュを教材とした英語学習に対して極めて否定的であることと対比すると、論点が明瞭になる。

アクターズ・イングリッシュは、アクターすなわち俳優がスクリプトすなわち台本通りにセリフを言う。そして、アクターがセリフのもとにしているスクリプトの文章は、リアルな日常の会話の中で話されている英文とは、驚くほど異なる、予めデザインされた書記言語である。このスクリプトの英文は、文法やストラクチャーについて、正確であるし、アクターのセリフ回しには、日常のリアルなイングリッシュとは異なる、独特なニュアンスのものが使われる。映画やドラマのセリフ回しは、観客を惹きつける必要性から、日常リアルな会話のあり方とは異なる「異化」されたものが使用されるのである。

ところが、現実に話されているパロールとしての英語では、人それぞれの独自のニュアンスがあり、また、文法的にも主語が脱落したり、時制が厳密でなかったりと、不正確さが、ある範囲において許容されている。スラングなども、場合によっては多用される。

すなわち、アクターズ・イングリッシュが、現実の英語運用の場面にそぐわないということで、コミュニカティブ・アプローチの有効性がクローズ・アップされてくるという側面もあるということなのだ。

但し、コミュニカティブ・アプローチは、留学経験者やリターニー、4 技能試験の成績上位者など英語上級者のクラスに限定せざるを得ない性格を有することには変わりがない。もちろん、将来的に、当該アプローチの改良型教授法が開発されたならば話は別である。

３．現代英語教授法の過渡期的性格とグローバル人材の育成という喫緊の課題

さて、これまで、既存の英語教授法について、概観してきた上で、見えて来ることは、現時点において、高等教育における英語教授法が、まだまだ未発達であり、特に英語文化圏とは対極にある日本人にとって、英語学習は非常に難しい課題であり、日本人にとり非常に適切な英語教授法あるいは学習法が未だに存在しないように思えるという悲観的な高等教育上の見通しである。ほとんどネイティブに近い英語運用能力がなければ、グローバルな舞台・分野での活躍という中教審答申で

プランニングされているような状況への到達は、ほぼ不可能に近いと稿者には思われる。

例えば、非常に研究能力の高い日本人大学教員がアメリカのトップレベルの大学の採用面接を受けた際に、不採用になった。あとでその応募者が理由を聞くと、英語の発音があまり良く出来ていなかったからだという。その応募者は３年ほどアメリカに滞在していた。

その他、大手 IT 企業や金融企業などでも、似たような状況であろう。グローバル化、国際化によって、非英語圏の人材が英語運用能力の修得にしのぎを削っている昨今、英語学習が過当競争化している。

まずは、その過当競争に勝たなければ、グローバルな国際社会で活躍出来るグローバル人材にはなれないのが現実である。

４．明治期欧化政策下におけるラフカディオ・ハーンによる高等英語教育とその教授法

TOEFL スコアの 2016 年における非英語圏国別ランキングで日本は 170 ヵ国中 145 位である[8]。TOEFL は 4 技能試験であるから、文法訳読法、日本人英語教員、リーディング・文法重視の英語教育に慣れ親しんだ日本人の唯一の得点源はリーディングセクションだけであろう。

戦後の英語教育のスキームの結果が、この 145 位という数字に現れていると思う。しかしながら、今すぐに、この順位が V 字回復可能となるような教授法・教育法について、稿者の観点からは、現時点においては存在しない可能性があることについては、既に上記した通りである。

そこで、稿者は、ニューロサイエンスや脳科学、発達心理学や認知科学など様々なサイエンスからのアプローチによって、非常に有効な新たな言語学習の方法が今後構築される可能性を予測しつつも、そうした脳や知覚、ニューロンの問題以前に我々が日本人として歩んできた「歴史」という観点から英語教育の問題を紐解き、日本における英語教育史という分析視角から知見を得ようと思う。

その中でも、明治期日本の欧化政策のもと日本の高等教育機関で２番目のネイティブ英語講師になったラフカディオ・ハーンに光を当てたい。

ラフカディオ・ハーン（以下ハーン）は、1890 年に来日し、この年の７月、アメリカで知り合った服部一三の紹介で、明治期欧化政策のもと、島根県尋常中学校と島根県尋常師範学校（現島根大学)の英語教師に就任する。

そして、その翌年 1891 年に熊本の第五高等学校の英語教師就任を経て、1896 年には、日本で 2 番目の英語ネイティブの東京帝国大学文科大学の英語英文学講師に就任する（1 代目はバシル・ホール・チェンバレン)。この際に日本に帰化し「小泉八雲」という日本名を名乗る。

この東京帝国大学の英語英文学講師の講義録が残っている。タイトルは、“Books and Habits, from the Lectures of Lafcadio Hearn” で 1922 年にアメリカで出版されている。この講義録によって、ハーンの英語英文教育の方法論とそのエッセンスを知ることが出来る。

また、ハーンの後任は夏目漱石であるが、周知の通り、ハーンの解任に対して、学生達は反対運動を起こしている。当時、ほとんど英語が出来ない学生が大半の中、それほどの人気と反響を得た理由は何か。ここに現代の英語教育法と全く異なるハーンの教育法上の秘密がある（後述)。また、ハーンとは対照的に説明に日本語を多用し、かつ批評的・分析的な漱石の授業は学生たちには不評であった[9]。ハーンの英語教育方法と漱石のそれとは、ある意味対照的であり、その対照性から、色々な教育法上の問題が浮かんで来る。それは、単にネイティブ講師と日本人講師の差異という問題ではない。

ハーンの当該講義録は、その “INTRODUCTION” によると、“They are all taken from the student notes of Hearn’s lectures at the University of Tokyo, 1896-1902” [10]とあって、1896 年から 1902 年までの間、当時の東京帝大でハーンの英語英文講義を受講した受講生によって、全て記録された

ものだという。

ハーンの講義が全て英語によって行われたことは、時折“you know”などの filler（語句がすぐに出てこない時などに言葉の空白を埋めるために使う、それ自体特に意味のない埋め草的表現）までもが、記録されていることによって分かる。つまり、記録した学生は、ハーンが講義で話した英語を、ほぼ一言一句ノートテイキングしたようなのだ。

これは、英語に触れる機会の圧倒的に少なかった、当時の学生のリスニング力を考えると驚異的にも思えるが、ハーンのスピーキングスピードも比較的聴き取りやすいようにスローペースであったり、クリアーな発音に気を遣ったりと、ハーン自身の工夫によるところも大きいのであろう。

また、ハーンは、“Let me say, then, that the all-important thing for the student of English literature to try to understand, is that in Western countries woman is a cult, a religion, or if you like still plainer language, I shall say that in Western countries woman is a god.”[11]というように、文化的な背景や落差などにも常に気を配りながら、日本の学生には分かりづらいと思われる概念や煩雑なストラクチャーの文章を使った際には、“woman is a god.”というような思い切った文章や語彙の単純化によって、煩雑な部分を言い換えて、センテンスの全体を理解させようという配慮もしている。そのため、“in short”「短く簡略化して表現すると」というな表現なども多用される。

こうすると、簡略化された表現から遡って、比較的難しい言い回しの文意をも学生は汲み取ることが出来る。これは、ハーンの教授法におけるストラテジーの一種であると言えるだろう。

５．ラフカディオ・ハーンによる高等英語教授法の特質１「カルチャーギャップの克服」

さて、ハーンの英語教育においては、まず第一に、上記のような文化的な落差、カルチャーギャップをいかに克服するかに留意工夫がなされているかが分かる。

> I am impelled to do so by a recent conversation with one of the cleverest students that I ever had, who acknowledged his total inability to understand some of the commonest facts in Western life,-all those facts relating, directly or indirectly, to the position of woman in Western literature as reflecting Western life.[12]

当時、既に日本文化をも熟知したハーンは、西洋文化と日本文化のカルチャーギャップの好例として“woman”「女性」の問題をおそらく意図的に取り上げたのであろう。

明治期の女性の地位は、封建制度下のそれと比べても、大きな差はなく参政権もなく、家父長制的な文化風土の中で低い地位に置かれていた当時の日本の文化的環境の中にいる学生にとって、当時の英米の文学のなかに登場する女性たちが男性から厚遇されている状況が理解出来ないことは、当然であると見抜いていたハーンは、この問題を逆手にとって、現在の異文化理解論にも通じるような議論を展開し、カルチャーギャップの克服とは、異なる世界（ここでは、西洋文化）を出来るだけ正確に理解することであり、そのことがすなわち異なる言語文化（ここでは英語文化）とその言語（英語）を修得することとイコールであるというフレームワークで講義を展開する。

ここで、ハーンが直面している英語教育におけるカルチャーギャップの問題は、現代におけるグローバル時代のなかの英語教育にも全く通底する。

時代が進んでも、英語圏、例えば、イギリス文化とアメリカ文化に対する日本文化の間のカルチャーギャップは厳然として存在し、そのカルチャーギャップによる文化衝突やディスコミュニケーションは、コミュニケーションツールが英語であれ日本語であれ、常に発生する。異文化理解が、

言語学習における大きな柱の１つであることは、言語教育学上の共通認識であるとさえ言える。

そのような、現代の英語教育学上の１つの大きなテーマをラフカディオ・ハーンは、明治期の日本の高等教育において先取りしていたのである。

６．ラフカディオ・ハーンによる高等英語教授法の特質２「英語教育における鍵概念の深層教授法」

次にハーンが重要なマテリアル、教材として取り上げたのが、当時の英詩およびイギリス小説における最重要テーマであった“love”という概念である。

この場合においてもハーンはカルチャーギャップを意識しながら講義を進めている。日本人学生にとっても“love”は、日本語の訳語である「愛」に変換した場合、男女の恋愛ということでは、共通するものがあり、学生たちが、これに飛びついて、興味や関心を大いに示すであろうことをハーンは計算していたであろう。

現代の語学学習においても、アメリカ言語学研究所などが、自身にとって興味のあるマテリアルの学習を学習効果の観点から推奨しているが、ここでもハーンは、そうした現代のメソッドを先取りしている。

ところが、ハーンは実際の授業では、英詩における“love”というテーマが、非常に特異なものであり、他国の概念や日常会話で使用されるものとも意味合いが異なるとして、学生たちに、そのカルチャーギャップや欧米における多様性を理解させる。

まずは、彼ら学生の観点をズラしてみせる。

> Of course, the simple explanation of the fact is that marriage is the most important act of man's life in Europe or America, and that everything depends upon it. It is quite different on this side of the world. But the simple explanation of the difference is not enough. There are many things to be explained. Why should not only the novel writers but all the poets make love the principal subject of their work?[13]

ハーンは、ヨーロッパやアメリカにおける結婚観と当時の日本文化におけるそれとのズレ、大きな違いの存在について説き、これらの差異については、詳細で多くの説明が必要となること、またヨーロッパやアメリカにおける小説家や詩人が“love”を主要なテーマとするのは何故かと問いかける。

明治期の日本においても恋愛小説は存在した。ただ、多くの恋愛小説は心中物や『金色夜叉』のような奇怪性や悲恋を扱ったものが多く大衆の人気を集めていた。これらプロットやストーリー、特に恋愛の描かれ方において、ハーンは、日本と欧米のそれに差異を読み取り、おそらく、そうした両者の差異性を学生に投げかけたのだ。

このようにして、ハーンは学生の“love”という概念に対する先入観に揺さぶりをかけた上で、さらに欧米各国における“love”概念の違いについてまで、比較文化論的に言及していく。その比較は時間軸を遡り、聖書やプラトンの哲学的な考察や理論にまで言及されていく。ここで、学生たちは、一元的な“love”ではなく、多元的で多様な広がりを持った“love”の広大な世界に一旦投げ出される。

では、ハーンは、“love”概念の欧米世界における多様なる広がりに言及して、広く浅い概説を目指したのだろうか。

実際には、そうではなく、ハーンの比較学的方法は、英詩やイギリス小説における英語語彙としての“love”の“definition”「定義」を明瞭化するために選ばれた便宜的な手続きであり、手段であったものと思われる。

> For example, the English public wants novels about love, but the love must be the

love of a girl who is to become somebody's wife. The rule in the English novel is to describe the pains, fears, and struggles of the period before marriage-the contest in the world for the right of marriage.A man must not write a novel about any other point of love.[14]

上記引用部分は、北欧文学における“love”の概念やルールを例示した後で、イギリス小説における“love”のあり方やルールを示したものだが、ハーンの英語教育における比較的手法が、結局はイギリスのケースに関する説明を明瞭化している一節である。

このようにして、ハーンはイギリス小説や英詩に用いられる英語語彙の意味、定義、用法、ルールなどに当該問題系全体の説明を収斂させて、その輪郭を浮かび上がらせ、明瞭化するという教授法をとっている。

だが、それで終わっていては、英語教育上の理解としては、まだ浅きに止まる。ハーンは、そのように考えたに違いない。ハーンの英語教育の真骨頂は、英語英文教育上の鍵となる重要な概念や語彙の意味論上の浅く狭い理解に終わらない点にある。

The difficulty may, I think, be met by remembering the extraordinary character of the mental phenomena which manifest themselves in the time of passion. There is during that time a strange illusion, an illusion so wonderful that it has engaged the attention of great philosophers for thousands of years; Plato, you know, tried to explain it in a very famous theory.I mean the illusion that seems to charm, or rather, actually does charm the senses of a man at a certain time. To his eye a certain face has suddenly become the most beautiful object in the world.To his ears the accents of one voice become the sweetest of all music. Reason has nothing to do with this, and reason has no power against the enchantment. Out of Nature's mystery, somehow or other, this strange magic suddenly illuminates the senses of a man; then vanishes again, as noiselessly as it came.It is a very ghostly thing, and can not be explained by any theory not of a very ghostly kind.Even Herbert Spencer has devoted his reasoning to a new theory about it. I need not go further in this particular than to tell you that in a certain way passion is now thought to have something to do with other lives than the present; in short, it is a kind of organic memory of relations that existed in thousands and tens of thousands of former states of being. Right or wrong though the theories may be, this mysterious moment of love, the period of this illusion, is properly the subject of high poetry, simply because it is the most beautiful and the most wonderful experience of a human life.[15]

少し長いが、重要な部分なので引用した。

ここに至って、ハーンは“love”に関して、辞書的な定義や比較的な手法による意味の明瞭化、さらには、現代の言語学的な意味論上の内包と外延などによる説明すらもはるかに超えるようなかたちで、謂わば“love”という英語語彙の持つ言語感覚の深層のようなものを、比喩表現などの手法までも駆使しながら、まさに“organic”「本質的」かつ「有機的」に説明するのである。

ハーンによれば、“love”とは、ミステリアスであり底知れぬ自然界の神秘であり、単純に理由づけすることの出来ない魔術的な魅力であり、幻想であり、“ghostly thing”すなわち、まるで「幽

霊のようなもの」だと説かれる。それは不思議な魔法のように突然､人間のある感覚を照らし出し、それが現れた時と同じように音もなく消える。その現象そのものが、まるで「幽霊」のようだと形容される。

“love” という英語語彙を「幽霊」のような現象として説明したのは、ハーバート・スペンサーの名前も挙げられているが、日本の幽霊について研究したハーンならではだが、説明に説得力がある。

そして、何よりも、ハーンのこの説明の特筆すべき点は、1 つの英単語を掘り下げていく、その「深さ」である。

ハーンの授業からは、たった一つの英単語に一つの宇宙が存在するような、それほどの奥行きの「深さ」が英語の世界には驚くべき深度で存在することを学生に悟らしめようとする意図が感じ取られるのである。

現在､日本で行われている英語の授業において、ハーンのような英語の深淵とも言えるような世界やレベルに到達する例を稿者は知らない。一語には深い奥行きが存在する。そのことをハーンは英詩の世界から学びとったのかも知れない。あるいは “ghostly” という意味深な表現を使っていることからすると、ハーンの愛した日本の怪談文芸における「幽霊」や「死」などの不可知性からヒントを得たものかもしれない。ハーンの如上の教授法の原拠についての考察は今後の課題だが、現に英語の教授法として、講義録の中に表された方法は、我々の英語学習や英語教授法に対する認識を改めるような性質を帯びており、語彙の表層的なレベルにとどまる英語学習や英語教育（現代の高等教育現場における英語教育、英語学習の実態のほとんどは、おそらくそうであろう）の陥穽について警鐘を鳴らすものであろう。

おわりに

ハーンの英語教育の教授法の特徴は、文化的な背景にまで踏み込んで、異文化間のカルチャーギャップを克服していく点と、述べてきたような、英語語彙に対する辞書的定義や言語学的意味論をはるかに超えるような､語彙の掘り下げの「深さ」、すなわち一語の語彙が孕む謂わば深層心理的あるいは感性的に深いレベルの意味合い＝「語彙の深層性」の掘り下げにまで踏み込んで行く独特な手法にあると言えるだろう。

このようなハーンの英語教授法は、現代の英語教育に置き換えても充分に通用するものであり、アクティブ・ラーニング等の最新の教育法に関して、言及されるところの「深い学び」の先駆的な実践者であり、ハーンの教授法から学んで、我々は、近い将来的かつ応用的な観点から従来的な英語教授法の改良も視野に入れつつ新たな英語教授法の構築を喫緊の課題として検討すべきであろう。

註

[1] 文部科学省（2018）「1.子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について（諮問）」および「2.これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について（諮問）」（『26 文科生第 253 号平成 26 年 7 月 29 日中央教育審議会答申』）

[2] Richards,J.C.&Rodgers,T.S.(1986) “Approaches and Methods in Language Teaching”, Cambridge University Press, Cambridge.

[3] Richards, I.A&Gibson, Christine (1945) “English Through Pictures”, Pocket Books, New York.

[4] Asher, J.J. (1982) “Total Physical Respons Approach”, ‘Inovative Approaches to Second Language Learning’, R.W.Blair (ed.), Newbury House; Mass.

[5] Renard, R (1975) “Introduction to the Verbo-tonal Methcd of Phonetic Correction”, Paris, Didier.

[6] Finlay, B. L. & Sengelaub, D. R.(Eds.), (1971) “Development of the vertebrate retina”, New York. Yeung, H., Denison, S., & Johnson, S. P. (2016) “Infants′ looking to surprising events: When eye-tracking reveals more than looking time”, PLoS One, 11.

[7] Johnson, K. (1982), "Communicative Syllabus Design and Methodology", Pergamon.
Johnson, K. and Morrow, K. (1981), "Communication in the classroom", Longman.
Littlewood, W. (1981), "Communicative Language Teaching: An Introduction", Cambridge UP.

[8] "Test and Score Data Summary for TOEFL iBT Tests: January 2016. December 2016 Test Data", ETS, TOEFL

[9] 夏目漱石「文芸評論」『漱石全集』第十巻（岩波書店、1966）

[10] "Books and Habits, from the Lectures of Lafcadio Hearn", p.3.

[11] "Books and Habits, from the Lectures of Lafcadio Hearn", pp.10-11.

[12] "Books and Habits, from the Lectures of Lafcadio Hearn", p.9.

[13] "Books and Habits, from the Lectures of Lafcadio Hearn", p.13.

[14] "Books and Habits, from the Lectures of Lafcadio Hearn", p.15.

[15] "Books and Habits, from the Lectures of Lafcadio Hearn", p.18.

中尾瑞樹（関西大学教育開発支援センター）